

有島武郎と韓国文学 (2) :
1920年代初期の朝鮮における「小さき者へ」の受容

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 希貞 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17463

有島武郎と韓国文学（2）

—1920年代初期の朝鮮における「小さき者へ」の受容—

金 希 貞

1. はじめに

1920年代初期、有島武郎は日本に留学し韓国近代文学を切り開いていった草創期の朝鮮人作家たちに、最もよく読まれた日本人作家であろう。田榮澤は、「すばらしい西洋文学に目を開かれ、当時非常な勢いで隆盛していた日本の文壇に対し、その中でも特に有島武郎などの文学に対しては羨望の思いを禁じえなかった」と述べているし、日本の文学者を無視していた金東仁も、有島武郎にだけは肯定的な評価をしている。また、『白樺』誌を毎月愛読するほどのファンであった朴鐘和は、「白樺派同人の中では有島武郎の作品とその人間性を最も好んだ」と述べている。

有島武郎が留学生たちの個人的な享受の対象に留まらず、朝鮮民衆の前に具体的に紹介されるようになるのは1920年になってからのことである。1920年9月、金東仁の翻訳によって『曙光』第8号に「死と其前後」が載り¹、翌年の1月朴錫胤により「小さき者へ」が『創造』第8号に掲載された²。当時、東京帝国大学法学部に在学中の留学生であった朴錫胤は「小さき者へ」に感動して一気に読み上げ、翻訳するまでに至ったと自ら述懐している。朴錫胤は「小さき者へ」のどのような点に感動をうけたのだろうか。

「C兄에게 (C兄に)」で朴錫胤は、「『小さき者へ』は芸術的にも、そこに内包されている思想からいっても有島武郎の作品の中で最も優秀なものである」と述べていることから、有島の「小さき者へ」から受けた感動が、母親を亡くした子供たちに送る父親のメッセージに対する共感だけではなかったように考えられる。また彼は、「小さき者へ」を翻訳した動機について「ロマンティズムの生活を憧憬する自分は、現実生活の不満と圧迫に反抗し、観念的に超越する方法を理想の境地におくことは当然である」と述べ、「平素、こうしたことを考えている事実が、この短編を、『創造』をお読みになる諸君に紹介しようという動機となりました」と告白している³。このことから朴錫胤は、自分をとり囲んでいる現実を「観念的に超越する方法」として、有島の「小さき者へ」から「理想の境地」を見出していたのではないだろうか。

「小さき者へ」は周知のように有島武郎の私生活を素材とした作品であるが、1910年代後半から朝鮮人作家たちに最もよく読まれ、注目され、感動を与えた作品である。金東仁は、「小さき者へ」をはじめ「平凡人の手紙」や「死とその前後」など、有島の私生活を素材とした作品に特別な関心を寄せている。彼が後に、自分の息子たちに呼び掛ける形式で書いた新聞連載作品「アギネ」を発表したことも、示唆するものは

大きい。

本稿ではまず、「小さき者へ」のどの点に朴錫胤が感動し、その翻訳を通して朝鮮の読者に訴えたかったものが何であったのかを考察してみることにする。さらに、朴錫胤や金東仁が「或る女」ではなく、「死とその前後」や「小さき者へ」のように有島の私生活を素材とした作品に関心を寄せていた時代的背景について調べてみる。これらの考察を通して、1920年代初期の朝鮮人留学生たちに受容されていた有島武郎像の側面が明らかになってくると思う。

2. 朴錫胤における「小さき者へ」

まず、朴錫胤が「小さき者へ」のどの点に感動をしたのかを見ていくことにしたい。朴錫胤が「小さき者へ」を初めて読んだ日の日記には、「1919年6月9日、夜10時に読み終える。この敬虔な母、この敬虔な父。このように生きている者こそ、真に人間らしい生き方をしていると言える。このような夫婦がいてこそ、この人間世界は純然たる、赤裸々な愛情の泉で沐浴をすることができる。少なくとも夫婦の間に生まれた子供には、このようにしてやりたいものだ」とある⁷。

彼が「小さき者へ」に感動したのは、敬虔な母親と父親の溢れるような夫婦愛と彼らの子供に対する愛情という一点に尽きる。そして、このような敬虔な生き方こそ「真に人間らしい生き方」であり、このような人間が生きる世界は純然たる愛情の世界である、と考えていることが分かる。「小さき者へ」に現れた人生に対する敬虔さや家族愛は、理想的な生活の在り方として朴錫胤に感動を与え、自らもそうしたいという願望を強めていくものであった。

京都を出た朴錫胤は岡山で降り、ある旅館の一室に入って「小さき者へ」を再読する。そして「小さき者へ」をまた一気に読み上げ、再び感激する様子がしっかり描かれている。2回目に読んだ日の感動はさらに強くなり、有島武郎を「敬虔な主義者」と呼び、「このコスモポリタンよ！ 私はあなたを賛美する、いや打ち伏して敬拝する」とまで記している。以下に、その部分の日記を引用してみよう。

「1919年7月6日 午後2時半。

昨日、私は京都を出た。しかし、運命の神は何を考えてか、私を岡山で降ろした。…(中略)…私は心行くまで旅愁の気分を味わいながら、旅館の一室に入り、そして、いま再び之を読む機会が私に与えられた。ある物が（「小さき者へ」を指す：筆者註）。私は目をみはりながら一気に息もつかせず読破してしまった。そして、その力強さにもう一度感激させられた。ああ、敬虔な主義者よ、【そして、この恐ろしいほら穴を埋めてしまわねばならない】このコスモポリタンよ、私はお前を賛美する。いや、打ち伏して敬拝する。【人生を生きていく以上、人生に深く関わらねば不幸である】実際、そうであらねばならない。人生の可能性を肯定する以上、どうしてただ平々凡々と暮らすことができようか。長い人生の悪の方面をことごとく経験するという意味ではない。心して、純に人生の奥義を

厳肅にすべて体験し、これを味わうことを望むだけである。これを私はしてみようと言うのだ。必ずしてみせる。たとえ転倒の憂き目を見ようとも、必ずや立ち上がって勝利して見せよう。…（中略）…私は生まれ変わった。悪魔！永遠に呪われんことを。正義の神よ、我が将来を祝福したまわんことを。私はあらゆるものを捨て去り、新生の道に踏み出した。人生を闘いのうちに終えるために、倒れて再び起き上がれなくするために。

至純に 真実に 厳肅に 人生を生きていくために
あらゆるものを愛するために、公平に、正義によって
悪魔よ！ 永久に 我が挑戦に答えよ
永遠の正、実、義、愛ゆえに生きん！ 1919年7月6日午後3時⁹

この日記からも朴錫胤が有島を「心して、純に人生の奥義を厳肅にすべて体験した人」だとして、賛美していたことが分かる。そして、厳肅に人生の奥義を味わうことこそが意味のある人生を送ることであり、そのような生き方を、人生の可能性を肯定する理想主義者はするべきだと書いている。それはすなわち、「真実に、厳肅に人生を生きていく」ために自分を囲んでいる「朝鮮の現実への不満や圧迫」と戦いながら、「新生の道」を歩んでいくことを宣言するものであった。

そして、この日記の後の1920年5月13日に書かれた『「自己」の改造』という文章には、彼が平素考えていた理想を実現するための具体的な方法が提示されている。ここで彼は、世界の潮流に沿うものとして、朝鮮人の精神の改造を求めている。この文章中を読むと、朝鮮人を改造しなければならない理由は、真の自由を獲得するためとしている。彼が語る自由には、政治的自由、経済的自由、人格的自由の三種類がある。その中でも最も重要な自由とは、人格的自由であると言う。彼は「人格的自由がなくては、実に我らの理想と一致する改造などは望むべくもない」と述べつつ、民族の伝統と因習を朝鮮人の未来にとっての足かせとみなし、そこから脱皮せねばならないと訴えている。なぜなら、それこそがこの世界の潮流であると主張しているのである。

また、文章中に彼は、「正義と人道の立場に立つ者は、どのような民族、どのような人間であるかにかかわらず我々の友人であり、悪に染まり非人道的な思想は、排斥」されねばならず、「我らの愛情は全人類に向けられねばならない」というコスモポリタンの思想を主張している。彼のいう「自己」とは、「人類の一分子としての人間」、「神の子としての人間」⁹である。こうしたコスモポリタンの思想は、「闇雲に自国の歴史のみが正しく、自国の先祖たちが残してくれたものだけがよいと言うのは偏見である」¹⁰という考え方を可能にしたばかりでなく、有島に対する感激と尊敬の気持ちをなんの街いもなく表出することにまで至っている。言葉を変えて言えば、朴錫胤は、民族や国家の概念を超越するものとして、＜正義、人道、愛情＞という理想主義的な観念を持つに至ったことが分かる。それゆえに、理想的な社会にするためには社会の基本単位である「家庭」からの改造が必要であったのである。「人格的自由」が保障される「純然たる愛情」が溢れる「家庭」を築いていかなければならない理由があった。朴錫胤は、それに相応しい理想的な家庭を、有島の「小さき者へ」

から見出したのではなからうか。「小さき者へ」に描かれている夫婦愛、子供愛、尊敬できる父親像こそ、「理想的な朝鮮社会」を作るためのモデルとなったのである。

このように、朴錫胤が有島の「小さき者へ」にそれほど感動した理由には、厳格な家父長的社会である当時の朝鮮社会が背景にあったのである。その背景ゆえに、有島武郎の家族愛と父親像が人間らしい生き方の模範像として、個人の精神的な改造を第一目標としていた近代朝鮮の知識人たちにすんなりと受け入れることになったのだと言えるのである。

3. 金東仁と大正ジャーナリズム

では、次に金東仁の場合を見ていくことにしたい。金東仁は、有島武郎に最も好意を持っていた朝鮮の作家である。日本の作家をそれほど高く評価していなかった金東仁は、有島に対してだけは、特別に多くの言及をしている。金東仁はその著作を通し13人の日本人作家に触れているが、の中で最も肯定的に最も多く言及している作家が有島武郎である。そして、金東仁は「死と其前後」を誰よりも早い時期に翻訳している。以下の引用は、金東仁が有島について言及した関係資料である¹⁾。

- (1) 金東仁「死と其前後」(翻訳)『曙光』第2巻第6号、1920年9月
- (2) 「有島武郎の「宣言」を読んだ。主人公の恋人であった女性が主人公の友達のもとに去ってしまったことが描いてあるが、最後は、本当に笑わせるような結末になった。」(「心の浅き者よ」『創造』3号、1919年12月、p33)
- (3) 「『母のいない子供!』 どれほど寂しく哀れな言葉であることか。日本の小説家有島武郎がこのように言ったのを、父は覚えている。有島にも母のいない子供が何人かいた。母のいない子供たちは、父の下で大事に育てられていた。ある雑誌社から『あなたは何か一番幸せですか』と聞かれた時、彼は自分が思ったことを率直に『ただ一人の母を持ち、母が今も生きていることです』と答えた。何気なく答えたが、ふっと自分の下にいる、母のいない子供を思って、大変すまなかったと述べている。」(『アギネ』の中の「海賊の娘」『東亞日報』1932年5月1日)
- (4) 「文学者である有島武郎がある文章で、『子供が生まれてからようやく子供の有り難さが分かる』と書いたが、印刷所のある職人が、『子供が生まれてからようやく父母の有り難さが分かる』と直したという。父母の有り難さは常識であるが、子供の有り難さというのは、新しい真理である。この有島武郎氏の話は、単なる奇驚な言葉だと軽蔑することはできない。子供が生まれ、しみじみと考えてみると、父母なるものは、痛切に子供の有り難さを感じる事が非常に多いのである。」(「息子の徳」『毎日申報』1935年7月18日)
- (5) 「その時は日本も有島武郎、菊地寛、芥川龍之介などが台頭する前であり、菊地の師匠の夏目漱石などの時代であった。」(『文壇30年史』の中の「文

上の引用中、(3)で言う「ある雑誌社との対談」とは有島武郎の「小さき者へ」の中に¹²、(4)の有島の文章をなおよす植字工の話は「平凡人の手紙」の中に出てくる話である¹³。「平凡人の手紙」は、安子の一周忌に安子が入院していた病院を訪ねていくことを書いたものであり、彼が翻訳した「死と其前後」は有島夫人の安子の死を素材に書かれた戯曲である。「小さき者へ」は、安子への追憶と残された子供に対する愛情を描いたものである。

これらを総合して見ると、金東仁は有島の作品の中でも、「宣言」(『白樺』第6巻第7号、10号～12号、1915年7月、10月～12月)、「死と其前後」(『新公論』1917、5月)、「平凡人の手紙」(『新潮』第27巻第1号、1917年7月)、「小さき者へ」(『新潮』第28巻第1号、1918年1月)を読んでいたことがわかる。これらの作品がすべて金東仁が東京に留学している時期の著作であったという点や、金東仁の有島についての5回の言及(有島への言及4か所、翻訳1か所)中の3回が有島の家族について、つまり、安子夫人の死と子供のことについてふれている点などは、注目される点である。

なぜ金東仁が有島武郎の私生活を知り得たかは、一部は作品を通じた知識であったともいえるが、そこには作家の私生活を読者に提供しようとした大正期のジャーナリズムの存在があったからだと考えられる。

竹腰幸夫は、「死と其前後」が華麗な注目を浴びたのは1918年10月に島村抱月を中心とした「芸術座」の公演が成功した後のことであると指摘している¹⁴。①有島武郎の「前評判や安子の遺稿『松蟲』の紹介が、『死と其前後』を<愛と人道>に<光明>を求めんとする真摯な作家の<自傳の一部>」として注目されたこと。②さらに「公演の好評が、有島の実人生と愛の認識への、いわば索引となって『惜みなく愛は奪ふ』(『新潮』1917年6月)や、『芸術を生む胎』(『新潮』1917年10月)『自我の考察』(『北海タイムス』1917年11月)などの評論」が発表されたこと。③また、「『實験室』(『中央公論』1918年9月)や『小さき者へ』(『新潮』1918年1月)などの、所謂人道主義、理想主義的作品を、より一層切実なものとして、愛読者の胸に印象づけた」ことが理由であると述べている¹⁵。

公演を前にした9月8日付「國民新聞」は三行二段抜きの見出しで、妻・安子のことやその遺書、また死を知らされたその後の遺児のこと、有島の<『死と其前後』は家内の事を書いたのです>という談話などを織りこんだ紹介記事を載せている¹⁶。このような経緯を通して竹腰の言うように、「『死と其前後』公演以後、安子の死と作家有島とは、読者にとって切り離すことのできないもの」となっていったようである。

しかし、有島武郎の作品と彼の私生活が重ね合わせて考えられるようになったのは、1917年5月「死と其前後」発表以後のことで、次々と発表された安子の死や残された子供のことを素材とした小説や戯曲、有島家への取材を特集記事とした雑誌、さらに有島武郎著作集の売り上げの増加などが相互に作用して、有島の私生活は彼の作品とあいまって有名になっていた。有島安子夫人の死に関しては1916年10月号の『新小説』に里見弾の「嫂の死」が書かれ、武郎の父親である有島武の死についても、1917

年4月に有島生馬が「父の死」を『新潮』に書いている。その1ヶ月後、有島武郎自身の手によって「死と其前後」(『新公論』同年5月)、「惜みなく愛は奪ふ」(『新潮』同年6月)、「平凡人の手紙」(『新潮』同年7月)といった有島家の私生活を素材にしたものが次々と発表されることになる。

同年9月には6人の著名人による「有島武郎の印象」が『新潮』に載せられ、有島の人間的な面や安子夫人の死後の彼の生活などが公開されている。1917年は有島も述べているように「嘗てない多作をした年」であり、その分、文壇の注目を浴びて有島は急速に人気作家となっていった。1918年1月に「小さき者へ」を発表、2月には『中央公論』の企画で子供を三人とも芸術家として世に送り出した有島家の両親に対する感想を武郎をはじめとする三人の子供に聞いており、これらを含めて1917年と1918年の9月までに文壇の話題となったものだけでも、1か月に平均約4回は有島関係の記事を目にすることができる。また有島も、1か月に平均約3篇は雑誌に書いている。発表の場も『新潮』、『新公論』、『中央公論』、『新小説』、『新家庭』、『太陽』、『読売新聞』、『大阪毎日新聞』、『東京日日新聞』などと多岐にわたって旺盛な創作意欲を見せている。つまり、有島は1918年10月の公演前から人気作家となりつつあったが、その活躍の延長線上で「死と其前後」が企画・舞台化されたとみるのが、妥当だと考えられる。そして公演に対する反響が追い風となって、安子夫人の死と残された子供への愛情は、彼の作品および思想と切り離すことのできない確固たるものとして関連づけられたのである¹⁷⁾。1917年10月18日から刊行された『有島武郎著作集 第1輯 死』の売り上げは、約1年後の1918年9月ですでに第8版を重ねたが、1918年10月の「死と其前後」公演から約1年後の1919年12月には第26版を出している。これには「死と其前後」の公演による影響が大きかったと考えられる。

このような有島の私生活とそれを主題とした一連の作品は、大正期のジャーナリズムの作用によって日本の文壇では有名な話題を提供するものとして注目をうけたのである。当時の日本に留学していた朝鮮の留学生たちにも伝わっていたものであった。だから、金東仁の有島に対する認識と留学生活で経験した当時の日本の文壇の雰囲気は、非常に重要な関係を見てとることができると言えるのである。

金東仁にとって、日本語の小説を書いたとされる1916年頃から『創造』創刊(1919年2月1日)までの時期は彼の文学的な学習が行われた時期として重要であり、この1916年から1919年2月までの時期の有島武郎の文壇活動がそのまま有島についての金東仁の認識に影響を与えているのである。このような事実は、先に論じた朴錫胤の場合にも例外ではない。朴錫胤は崔南善の妹・崔雪卿の夫として、1922年に東京帝国大学法学部政治学科を卒業したのだが¹⁸⁾、朴錫胤は東京に留学中に「小さき者へ」に接している。有島についての認識も金東仁と同様に、当時の日本の文壇のイメージを反映したものであったと言えるのである。

4. 朝鮮における有島武郎の「小さき者へ」の受容

ここでは、有島武郎の作品「小さき者へ」が1920年代初期の朝鮮の知識人たちに感動を与えた時代背景を説明し、なぜ有島の「小さき者へ」が受け入れられたのかを述べることにしたい。

まず、日本における反応をみると、1918年1月、「小さき者へ」が『新潮』に発表された1か月後の小説評で菊池寛は、「小さき者へ」を「芸術活動の源を、愛に置く作者の芸術観が、その俣に具体化されたやうな作品」だと評し、「新年の物の内では此作品が一番いい」と褒めている。また「若い時代を祝福する態度も立派」であり、「子供を中心として生きて行った主人公夫妻の愛に充ちた態度も、読む者に敬虔な心を起させる。子供を親の為に犠牲にせずして、親を子供の為に、踏台にしようと云ふ子供崇拜の思想も、今の日本には必要な物の一つである。」と述べている¹⁹。

では、当時の読者の目に「小さき者へ」は、どう映っていたのだろうか。まずは、子供に対する有島夫妻の愛が有島の実生活の投影として映され、「一つの愛の福音を宣伝したもの」²⁰とするものや、「愛に基く有島の芸術が具体化されたもの」²¹として読まれていたようである。一方では、その中の思想として読める「子供崇拜の思想」と、それに伴う日本の社会体制への批判と受けとられたのである。

たとえば福士幸次郎は「有島武郎論」で、「斃れた親を喰ひ尽して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがいい」という部分を引用しながら、「何故に『小さき者へ』に現はれる如く人を感動せしむべき慈愛の言葉に充ちつつ、然も同時に将来の親子の反噬を予想せしめる様な暗い悲壮な言葉を吐かれるか」と述べて、純粹な慈愛の父親に留まらず、時代の叛逆者、煩悶児としての有島に痛言を加えている²²。しかし、同じところに対して五十嵐萬吉は、「実に、涙ぐましいほど尊い理解が漲溢して居るではないか」としながら、旧家父長的な日本の親へ向けた有島武郎の思想に同感していることが見える。

世の親の凡てが、あらゆる利益と打算とに決然と袂別し、氏と同じ想念に向つて旅立つ時、人生は、如何に生氣に充ちた、澁刺の相を呈するであらうか。幾何の顧慮と逡巡とがその影を潜めるであらうか。あたたかい光りにみちた、しかも精進の譜の到る処に鳴りひびいてゐる人生!!²³

五十嵐は、福士幸次郎とは違う立場で、時代の叛逆者として旧社会制度と決別した有島の姿に崇高な人生を見出している。

以上、簡単に日本の反応を整理してみたが、このような評に対して朝鮮人留学生は「小さき者へ」に現れている愛に満ちた家族の物語に感動し、自分の属している「朝鮮社会の親たちに反省と改革」を促しているのである。こういう点では、当時の中国人も同じ反応を見せている。この点の中国側の研究として于耀明の『魯迅と周作人における有島武郎の受容』があるが、それは周作人と魯迅における「小さき者へ」の受容のされ方について述べているものである。周作人と魯迅の受容についての内容は、

この于耀明の論文を参考にしながら簡潔に整理してみれば、以下のようになる²⁴。

1918年の時点で、すでに有島武郎を武者小路実篤を始めとする白樺派の作家達と区別し、独立した一人の作家としてみるほど日本文学に慧眼を注いでいた周作人は、有島武郎の作品の中で「最も好きなもの」として「小さき者へ」を挙げている。また、『周作人日記』によると、周作人は「有島武郎著作集」を第1輯の『死』から注文し、ほとんど揃えていた。周作人から借りた『白樺の森』で「小さき者へ」を読んだ魯迅は、「とてもいい言葉がたくさんある」といい、そのいいと思った言葉を中国語に抄訳し、自分の随感録に引用して『新青年』（63『小さき者へ』1919年）に載せ、中国の読者に紹介した。魯迅は「小さき者へ」を読む2日前に書いた「我々はいまいかにして父親となるか」の中で、「父は子に対して絶対の権力と威厳をもつと、彼らは考えている。父親の話すことに間違いはあり得ず、息子の話は言わぬまえから間違っているのである」と従来の倫理想を厳しく批判し、本来の親子関係を「現在の子は将来の父であり、将来の祖父でもある」と正した。その点について于耀明は、魯迅が「小さき者へ」に感動をうけて翻訳にまでいたった理由について、「魯迅が批判し、啓蒙し、期待して呼びかけていることを、有島が信念をもって答えているかのように思い、打たれたのだろう」と述べている。こうした点は、中国人だけにではなく、従来の儒教的な家父長的な家庭制度から個人の自由と個性を確立し、近代化に進もうとする日本や朝鮮の青年たちにも同様な感動を持って受け入れられたのである。

では次に、朝鮮の作家である田榮澤に目を向けてみることにする。田榮澤は「家庭制度を改革せよ」（『女子界』第2号、1918年3月）という文章で、「家庭は人生の安息と快楽を与えるところであるはずなのに、朝鮮の家庭はむしろ不平や苦痛を与えている。こんなに哀しいことがどこにあるだろう。」と書き、朝鮮の家庭の問題点を古来からの儒教的な家庭制度にあるとしている。また「朝鮮の家庭で、父親は専制君主であり、その他の家族は全てが臣民である。夫は一家族の主人で、夫人と他の家族は皆奴隷である。このような家庭に如何なる和平があり、如何なる快楽を望むことができるだろうか。」と歎いている。そして、朝鮮の父母に子供教育の心得として、次のように述べている。

朝鮮の家庭では、＜子供に対する尊重と権利＞を知らず、子供への教育に対する道理をも全く理解できず、ただ子供を蔑む気持ちをもって、自分の感情のまま罵ったり、殴りまくる。こうした社会で如何なる子女教育が施されるだろう。子女を持った以上、父母はその体と心を全て子女の将来のため献身せねばならない。父母は子女のため生きるのが義務であり、快楽とせねばならない。これは民族の発展と繁栄のため、社会の進歩や発達のために最も大事なことである²⁵。

田榮澤は、ここで「父母なる以上、子女の将来のために生きるのが父母の義務」であり、「その体と心を全て子女の将来のため献身せねばならない」とまで述べている。近代朝鮮の作家を代表する李光洙が『子女中心論』を書いて儒林の間の問題を起したのが1918年9月であるから、それより6か月も早い田榮澤の文章は、当時としてはか

なり破格のものであったといえる。

朝鮮では、1908年11月に崔南善によって「少年の国」が高らかに宣言されて以来、子供優先思想が朝鮮近代化の事業の中で進められた。崔南善の詩「海より少年へ」（『少年』1908年11月）の発表を皮切りに、雑誌、詩、小説、評論はこぞって少年を主題に取り上げはじめる。李光洙の「今日我が韓青年と情育」（『大韓輿論報』第10号1910年）「今日我が韓青年の境遇」（『詩話』1910年）「朝鮮家庭の改革」（『詩話』1916年）「早婚の悪習」（『詩話』1916年）「少年の悲哀」（『青春』第8号、1917年6月）「幼き友へ」（『青春』第9～11号、1917年7～11月）「子女中心論」（『青春』第15号、1918年9月）「少年へ」（『開闢』第17号、1921年11月）など、少年を賛美する作品が続出した。年長のものへの絶対的な服従と礼儀が徳目とされた朝鮮の社会で、こうした少年賛美ものは、未来を背負っていく子供に対する希望や期待に端を発して、旧朝鮮の社会改造および民族の近代化に繋がるものとして唱えられていくことになった。

「家庭制度を改革せよ」によって子供に対する父親への覚醒を主張した田榮澤が、1年後の1919年3月、少年を主人公にした「馬鹿？天才？」（『創造』第2号、1919年3月）を書いたのも、少年を一人の人格者としてみた彼の考え方が反映されたものであったろう。

1910年代から進められてきた子供賛美運動は当時の青年の間で新しい家庭、近代的な家庭作りに欠かせないものとして認識されていった。そして子供を人格者と見る子供尊重思想は、男女平等運動とともに「朝鮮の家庭の改革や社会批判」に直結する形で現れたのである。家庭においては夫だけが主人なのではなく、家庭での妻の重要性が、男女平等や女子教育運動においても唱えられたのである。

また、近代的な産物としての自由恋愛は、家長同士によって結ばれた従来の結婚形式に波紋を与えていき、自己の意志尊重による結婚は理想的な形として青年の間で流行した。しかし、そこには副作用もあった。早婚制度によって妻を持っていた者が、東京留学先で自由恋愛をして先妻に離婚を迫ったり、離婚してくれると思っていた恋愛相手が離婚に応じず、反対に配偶者に捨てられるというケースが多発し、社会問題となっていた。林岬正は「俗恋愛は反対」で、既婚男性による恋愛の被害が及ぼす社会的な悪影響について語っている²⁶。結婚に到るための純粋な自由恋愛は肯定されるが、既婚者の自由恋愛は社会の問題となり、再婚問題と離婚問題が登場する²⁷。「創造」の中の小説にも既婚男性の恋愛問題が素材となっている小説が少なくない。これは当時の朝鮮の現実を物語っているものである。

例えば、田榮澤の「운명（運命）」（『創造』第3号、1919年12月）はモデル小説として、当時の朝鮮文壇を騒がせた²⁸。「運命」は、東京留学生である主人公・呉東俊が朝鮮に妻がいながら、東京で音楽学校に通うHと恋愛をするというストーリーである。「運命」を読んだ金煥は『創造』第3号の「編集後記」で、呉東俊を裏切ったHについて、「背徳者Hが限りなく憎いです。私はこの小説を読みながら、Hが誰なのかは知らないけれども、そばにいたら殴りたくなりました。」²⁹とまで述べている。呉東俊とHが実在の人物だということが現実感を増し、金煥をして興奮させていることは想像にかたくない。しかしながら、ここには同じ被害者として呉東俊の妻に対する視線

は、全く感じられないのである。

金東仁の「心の浅き者よ」（『創造』3～6号、1919年12月～1920年5月）の主人公Kも妻がいながらYと恋愛をする。また、田榮澤の「惠善の死」（『創造』第1号、1919年2月）の惠善は、早婚制度と俗恋愛が生んだ被害者である。東京に留学している婚約者を待っている惠善は、婚約者に新しい恋人が出来たことを知り、女として生まれた自分の境遇を悲観して自殺する。呉東俊の妻もKの妻も惠善も、この「俗恋愛」の被害者なのである。

金東仁は「目下我が朝鮮人の結婚及び離婚問題に対して」という文章で離婚について、「離婚については言いづらい。離婚（ここで離婚というのは、最近流行している、男たちのいう完全な理解のない結婚はゼロだといってこれを請求するものを指す）は、男としてみれば当然のことであろうが、何百年も前から因襲に慣れている女子の心に、暗い影を落とすのは一つの問題である。互いに譲り合って、よい方にするのが最大の方策であろう。」と述べ、離婚に対する難しい心情を素直に表している。

自由恋愛が肯定されるのは未婚の男女に限るのであって、旧制度の犠牲になった既婚者には当たらないというのも不平等である。だからといって既婚者に自由恋愛が許されれば、理想的な相手と新しい家庭を作る際には、必ず離婚の問題が生じるのである。個人の意志が尊重されなければならない近代的な個人は、誰にでも適用される。妻の意志を無視し、自分の意志だけで離婚を強要することも男女平等ではない。そして、離婚された女性や先に夫に死なれた女性にとっての再婚の問題についても、貞操や守節を強要する朝鮮社会では、それほど簡単に許されるものではなかったのである。

このように、1920年を前後とする朝鮮において、個人の自由意志が反映された人間らしい生き方が近代的だとされたのである。しかしながら、朝鮮が進むべき道だと提示した彼等の主張で当時の朝鮮社会の問題を解決するには、あまりにも大きな矛盾を内包していた。そうした朝鮮の状況にあって、有島武郎の「小さき者へ」に描かれた愛で結ばれた夫婦愛、その間から生まれた子供への限りなき愛は朝鮮青年の心を打ち、達成すべきモデルとして登場したのである。

「小さき者へ」を読んだ朴錫胤が「この敬虔な母、この敬虔な父。このように生きている者こそ、真に人間らしい生き方をしている」と評し、「このような夫婦がいてこそ、この人間世界は純然たる、赤裸々な愛情の泉で沐浴をすることができる。少なくとも夫婦の間に生まれた子供には、このようにしてやりたいものだ」と述べたのも、朝鮮において現実の社会改造が難しければ難しいほど、理想的かつ切実に思われたであろう。

自由恋愛あるいは愛に基づく家族像は、近代的な個人の意志が保証される社会を作ろうとする者にとって、旧社会制度への批判に繋がっていくのは避けられないことであった。しかし、「俗恋愛」という問題が浮上して離婚問題や再婚問題などを生むに至ったことを考えれば、当時の朝鮮において自由恋愛は必ずしも理想的で幸せを齎すものではなかったのである。夫婦両者が自分の意志による選択ができない状態におかれている以上、自由意志という新しい現象は他方においてある種の犠牲を強要するものとなったのである。

5. おわりに

以上のように本稿では、1920年代初期の朝鮮における有島武郎「小さき者へ」受容の一側面を考察した。1920年代初期の朝鮮における有島武郎への評価は、日本へ留学して日本の文学に触れて帰ってきた朴錫胤、金東仁、廉想渉たちによってもたらされたが、朴錫胤や金東仁、田榮澤といった近代朝鮮の代表的な作家たちの間で特に有島武郎に対しての評価が高かった理由について、考察を加えてきた。

朴錫胤にとっての「小さき者へ」とは、母親を亡くした子供たちを送る父親のメッセージに対する共感を呼び起こしただけではなく、厳格な家父長的社会である当時の朝鮮においても大きな意味を持つものであったことが分かった。つまり、有島の「小さき者へ」で描かれた家族愛と父親像は、人間らしい生き方の模範像として朴錫胤の理想の生き方として提示されたのであり、さらに、朝鮮社会に生きる朝鮮の人々に対して「人格的な自由」が保障される精神改造を目指す第一目標として、朴錫胤に受け入れられたのであった。そして、有島の作品と彼の私生活が重ね合わせて考えられた背景には、大正期のジャーナリズムの存在があったということも指摘した。その代表的な例が金東仁であった。金東仁の有島認識は、ほとんどが有島の私生活に集中している。日本留学中の日本の文壇のイメージが朝鮮の留学生にそのまま影響を表している面では、金東仁も朴錫胤も例外ではなかったのである。

朴錫胤や金東仁など当時の朝鮮の青年たちは、早婚制度に反対しつつ自由恋愛による結婚を主張していた。その時に登場した有島武郎の「小さき者へ」で表された夫婦愛や子供への愛、尊敬できる父親像などといった具体的な指針が理想的な家庭のあり方として、彼らに深く心に刻まれたに違いない。そして、その理想像は、ただちに朝鮮社会にはびこる旧道徳や家父長的な既存の社会制度に対する批判や対抗に繋がっていき、「近代的」な家庭を志向させる原動力となっていくのである。

また、新しい世代が古い世代を踏台にして進んでいくことを認めた有島の子供優先の思想は、日本だけではなく、従来の家父長的な家庭制度から個人の自由と個性を確立し、社会改造を進もうとする中国や朝鮮の青年たちにも、国を超えて感動を与えたのであった。このことは、日本だけでなく朝鮮や中国といった「東洋」諸国で同時代的な思潮の流れの形成をも意味するが、そこでの有島武郎という作家と作品の存在は、はからずして大きいものであったといえるのである。つまり、当時の朝鮮での有島という存在は、日本での評価を踏襲するのに留まらない。有島武郎という生き方と彼の存在を示した作品のメッセージが結果的に朝鮮社会における諸問題への打開策を示したのであり、近代という時代にふさわしい理想的な人間の生活像を探っていた朝鮮の青年たちにとって、一条の光を見出すモデルとなったのである。

付記 本稿は、平成18年度科学研究費補助金基盤研究C「1910~1930<日韓・韓日>文学交流の歴史—<移入>という視座から—」の成果の一部である。

注

- 1 田榮澤「私の文壇自叙伝—その時代の私の生活回顧記」『田榮澤全集』第3巻、牧園大学出版部、p505
- 2 朴鐘和「歴史は流れるとも青山は沈黙する」サンキョン出版社、1979年、p463
- 3 金東仁は「コム・シオディム」という筆名で有島武郎の「死と其前後」を翻訳しているが、惜しくも第1場までしか翻訳されていない。(コム・シオディム、「死と其前後」『曙光』第7号、1920年9月)
- 4 有島武郎の「小さき者へ」は、3回にわたって修正を加えられて発表された。その中で朴錫胤のテキストとなったのは、『有島武郎著作集 第七輯 小さき者へ』(1918年11月9日、叢文閣)であると考えられる。
- 5 「C兄に」によると、朴錫胤は1919年6月9日と同年の7月6日に「小さき者へ」を二回読み、その感動を皆に伝えるために1920年11月12日夜に翻訳をしたとある。少なくとも朴錫胤は「小さき者へ」を三回以上は読んでいると考えられる。(朴錫胤「C兄に」『創造』第8号、1921月1月、p.113~114)
- 6 拙論「有島武郎と韓国文学(1)—有島武郎の「小さき者へ」と金東仁の「アギネ」小考」(『金沢大学国語国文』第25号、金沢大学国語国文学会、2000年2月)参照。
- 7 5と同じ、p113
- 8 5と同じ、p113~114
- 9 朴錫胤「『自己』の改造」『学之光』第20号、1920年7月、p8
- 10 9と同じ。
- 11 金東仁が有島について言及した関係資料の翻訳は、拙論「金東仁の初期作品と『白樺』の文芸運動」(『金沢大学国語国文』第23号、金沢大学国語国文学会、1999年2月)にも同様に引用されているので詳しい内容については拙稿を参考されたい。
- 12 有島武郎「小さき者へ」『新潮』第28巻第1号、1918年1月、p3
・「お前たちは去年一人の、たつた一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまった。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雑誌社が『私の母』といふ小さな感想をかけといつてきた時、私は何の氣もなく、『自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてある事だ』と書いてのけた。而して私の万年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は悪事でも働いたように痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。回復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。」
- 13 有島武郎「平凡人の手紙」『有島武郎著作集 第一輯 死』新潮社、1919年12月、p144~145
・「僕は子供を持たない中から親子の關係を僕なりに解釋して一つの格言を作つてゐた。子供が生れた時に神輿的に口を衝いて出でもすると生氣がつかのだけれども、そこは平凡人の悲しさで、是れも理屈でこねあげた格言だからつまらないもんだが、然しそれを口外する事だけは子供が生れて、僕が親たるの資格を得た

時にしようと思つて、胸の中に保留して置いた。子供が生まれた。そこで僕は虎の子のやうにしてゐた格言を發表した。「子を持つて知る子の恩」と云ふのだ。何んだと君は思ふだらう。所が物好きな奴もあるもので、僕の弟に小説を商賣してゐるのがあつて、僕を小説の材料に使用した時、兄貴の言葉としてはこれ位を奇抜なものとして置くより仕方がないと思つたのだらう、その格言を文句の中に入れたもんだ。然るにある都合で僕が校正を見てやる事になつたら「子を持つて知る親の恩」としてあつた。多分植字の方で書き損じと思つたのだらう。僕は大切な格言が臺なしになつては大變だから、インキ赤々と親と云ふ字を抹殺して子の字に訂正して置いた。所がどうだ、雑誌が出て見ると、麗々と『子を持つて知る親の恩』と直つてゐるではないか。その時僕はつくづくと自分の平凡さが一面識もない植字工にまで知れ亘つてゐるのに驚かされた。」

- 14 竹腰幸夫『「死と其前後」論』【作品論有島武郎】雙文社出版、1981年6月
- 15 『死と其前後』に關係した年譜事項を見ると、1916年8月2日、安子死去／1917年5月「死と其前後」が「新公論」に發表される。／1917年10月、『有島武郎著作集第1輯 死』に「死と其前後」が収録される。新潮社／1918年10月、『芸術座』公演／1918年11月「死と其前後」中外新論／1911年9月15日～17日 舞臺協會により、有樂座で上演／同年9月30日～10月1日 再演／1922年9月22日～25日 飯塚友一郎宅の室内劇で上演。
- 16 「國民新聞」1918年9月8日
- 17 有島武郎の私生活と作品が結び付けられていたことは1917年頃からである。1918年10月の公演以前の事実を追っていくと次の通りである。
<1916年> 里見弴「嫂の死」【新小説】10月
<1917年> 有島生馬「父の死」【新潮】4月／有島武郎「死と其前後」【新公論】5月／広津和郎「読んだ僕の印象を」【時事新報】5月18日／有島武郎「平凡人の手紙」【新潮】7月／中村星湖「有島武郎氏の作品」【時事新報】7月3～5日／中村弧月「7月の文壇」【読売新聞】7月11日／前田晃「親不知の嶮へ行く」【文章世界】8月／有島武郎『「平凡人」の言禍』【読売新聞】8月8～10日／前田晃「作中人物の責任—有島武郎氏と氏の如き態度にある創作家に」【読売新聞】8月21～24日／「有島武郎の印象」【新潮】9月号（足助素一「極めて人間のなる人」、長与善郎「ノーブルな性質の人」、小山内薫「兄さんのやうな感じ」、XYZ「教師としての武郎氏」、尾島菊子「世を遠観した聖者風」、吹田順助「札幌時代の有島君」）／有島武郎「実験室」【中央公論】9月／江口漢「九月の小説と戯曲」【帝国文学】10月／西川勉「新秋の文壇」【文章世界】10月／「有島武郎著作集 第一輯 死」新潮社、10月18日／和辻哲郎「有島武郎の『死と其前後』および志賀直哉の『和解』—今年の創作界について—」【黒潮】12月／「有島武郎著作集 第二輯 宣言」新潮社、12月18日

- <1918年> 有島武郎「小さき者へ」『新潮』1月／有島武郎「私の母」『新家庭』1月／菊池寛「一月の文壇」『帝国文学』2月／有島武郎「私の父と母」『中央公論』2月号（有島生馬「両親に対する感想」里見弴「父と母から私の享けた性情」）／『有島武郎著作集 第三輯 カインの末裔』新潮社、2月20日／有島武郎「白樺の森」新潮社、3月26日（「小さき者へ」『潮霧』所収）／五十嵐萬吉「武郎氏の『小さき者へ』読後感」『文章世界』3月／江口煥「有島武郎論」『文章世界』4月／『有島武郎著作集 第四輯 叛逆者』新潮社、4月18日／『有島武郎著作集 第五輯 迷路』新潮社、6月28日／木村毅「有島武郎論」『新時代』7月号／『国民新聞』9月8日／『有島武郎著作集 第六輯 生れ出る悩み』叢文閣、9月12日／秋田雨雀「有島武郎の『死』の考察に就いて」『早稲田文学』9月号
- 18 反民族問題研究所編、「親日派99人」、トルベゲ、1994年、p51
 - 19 菊池寛「一月の文壇」『帝国文学』1918年2月、p137
 - 20 近松秋江「文芸時事」『読売新聞』1918年3月3日
 - 21 19と同じ、p137
 - 22 福士幸次郎「文壇新人論（2）有島武郎論」『新潮』1919年2月
 - 23 五十嵐萬吉「武郎氏の『小さき者に』讀後感」『文章世界』第13巻第3号、1918年3月、p. 224～225
 - 24 于耀明「魯迅と周作人における有島武郎の受容」『周作人と日本近代文学』翰林書房、2001年11月
 - 25 田榮澤「女子界」第2号、1918年3月、p11
 - 26 林崑正は「俗恋愛は反対」で、恋愛は西洋から日本を通して朝鮮に輸入されたが、それは東京等の地に留学した者による輸入であることを述べている。氏は結婚の基礎になる崇高な恋愛は必要であるが、現代の朝鮮社会に流行する俗恋愛は禁物だと主張している。ここでいう「俗恋愛」とは、結婚のための恋愛ではなく、「一時的な情意投合として恋愛をする」または、「既婚の男子が処女である女子と恋愛をし、女子も既婚の男子と恋愛することを悪く思わない恋愛」のことを指す。林崑正は、こういう俗恋愛は、社会衰敗の一原因になる悪事であると述べている。林崑正「俗恋愛は反対」、(『ソウル』第3号、1920年2月) p57～58
 - 27 曙光社は「曙光」第8号（1921年1月）で、「目下我が朝鮮人の結婚及び離婚問題に対して」を企画し、結婚と離婚問題について13人の意見を載せている。
 - 28 田榮澤「文壇のあの時節を回顧する」『田榮澤全集』第3巻、牧園大学出版部、1994年、p487
 - 29 金煥「編集後記」『創造』第3号、1919年12月、p78